

【種別】

トーチ

【初出】

I巻

【解説】

宝具をその身の内に蔵したトーチ。

“ミステス”が破壊されたり、“存在の力”が尽きて燃え尽きると、中身の宝具は世界に散らばる別のトーチのどれかにランダムに転移するため、『旅する宝の蔵』とも呼ばれる。

大抵の“ミステス”は宝具が偶然転移してきただけで、中身の宝具の影響で特殊な性質、能力を持つ者もいるものの、ただのトーチと変わらない力しか持っていない。

しかし、自ら“ミステス”となったモノである“天目一個”、『永遠の恋人』ヨーハンらのような例外中の例外は、その誕生時の力の総量は、“ミステス”になる人間の『運命という名の器』の体積と同じであり、そのため“天目一個”などは誕生時点で並の“王”をしのぐ力を保有していた。

こういった特別な“ミステス”は、普通のトーチと制作過程が違い、“燐子”とも異なる構成原理で生まれる。

“ミステス”という存在自体には、封絶内で活動できる能力は無いが、例外として『零時迷子』の“ミステス”や、稀に“ミステス”に施される中の宝具を守るための自在法『戒禁』の効力によって、封絶内で動ける者もいる。

戦闘用“ミステス”は、“燐子”に比較して高度な意思総体を備えていることが保証されている人間を元に作成されるため、高度な“燐子”を作成できない“徒”にとって有用な存在である。しかし、高度な意思総体を宿す人間を人外の存在に変えるという行為は、制作者への反逆の可能性を常に内包する。それを防ぐべく、戦闘用“ミステス”には、反抗を防ぐ「制御プログラム」のような自在法が幾重にも掛けられる（『戒禁』はそこから派生した）。

しかし、自在法に適性のある優れた“ミステス”は、「制御プログラム」を破って制作者を殺害することすらある。その一例が『異形の戦輪使い』である。また、戦闘用ミステスの中には“天目一個”のように宝具を体内ではなく体外に出して武器として使う者もいる。

【宝具：名前】

『零時迷子』 : ヨーハン、坂井悠二

『贔殿遮那』 : “天目一個”

『パパゲーナ』 : 詳細不明（メアに寄生されていた少女）

（詳細不明） : 『異形の戦輪使い』

【由来・元ネタ】

由来は、「かすみのかかった、霧の深い」等の英訳「misty」の最上級「mistiest」と「神秘的な、神秘に包まれた」等の英訳「mysterious」を掛けた造語だと思われる（綴りは「Mistes」か？）。

「mystery（神秘、秘儀、秘法）」の語源となる「Mystes（秘教の高僧、神秘主義カルトの創始者）」という単語もあるようだ。語源を探るとギリシア語らしく、「通過儀礼を受けた者＝秘儀参加者」が原義であるらしい。ギリシア語読みでは「ミステース」。

英語で書かれたサイト（Wikipedia英語版など）では、主に「Mystes」のスペルが採用されている。

【コメント】

アニメ版から登場している。

最強の“ミステス”は誰だ？

そりゃ“祭礼の蛇”坂井悠二じゃないか？リベザルに“ミステス”扱いされてたし。……ん？でも“徒”扱いも色々されてたような……でも『玻璃壇』に映るからやっぱ“ミステス”か？

『[無何有鏡](#)』が創造されたから、そこではミステスはほとんど作られないんだろうな。

第二第三の『[約束の二人](#)』が出来ないことも無いだろう。『無何有鏡』には“存在の力”が満ちてるんだから、適当な宝具入れて力の受け渡しをするか、自動で力を取り入れる宝具造ればいいんじゃない？